

50年よせて4

20周年記念誌『光陵の20年』の巻末に「学校設立の経緯」という記事がある。

横浜国立大学教育学部に、将来付属高等学校を設置する意図のもとに、同大学付属小・中学校と同一敷地内にあった県立横浜立野高等学校の移転後の校舎に同高等学校山手分校が設立され、これを母体として付属高等学校を誘致すべく関係者によって運動が進められた。

(横浜国立大学の附属学校には「附」の文字が使われているが、『光陵の20年』原文にしたがって「付」の文字とした。)

横浜国立大学の附属高等学校とすることを想定して開設されたことは、今でもよく語られるところだ。よく語られるというのは、それが実現しなかったからであろう。実現しなかったが、光陵は県立高校として地を固め、山手分校開設から数えて今年50年目を迎えた。この間、光陵はつねに横浜国立大学との何らかの連携を持ち、とくにこの数年、附属横浜中学校からの連携枠入学、TOFY、KUとi-ハーベストの実施、横浜国立大学教育人間科学部3年生の教育実習の光陵での実施など、多くの連携事業を展開することとなった。横浜国立大学および教育人間科学部附属横浜中学校との連携は、これからも光陵を語っていく上での重要なファクターとなるであろうことは想像に難くない。

さて、1学期の終わり頃に50周年シンボルマークを生徒の皆さんに募ったところ、2作品の応募があった。ともに「思い」のこもったすてきなシンボルマークである。



左のシンボルマークは33HR小梁未来さんの作品である。5と0の重なった右側が緑色に、左側が青色に塗られている。作者コメントには、緑色の部分は「光あふれる陵」の形を、色は「芽生え」と「若木のみどり」を表し、中心の白く描かれたラインは、「権太坂をモチーフに50周年を一区切りとしてまだまだ先へ続く光陵の未来を表現」し、青色は、「光あふれる陵」と「光きらめく空」を、そして「青雲の心」を表しているとする。「光陵高校の歌」から着想し、光陵への「思い」が描かれる秀逸な作品、校長賞とした。

右のシンボルマークは18HR真壁ひなのさんの作品である。作者コメントには、「自然の多い光陵ゆえ、桜、葉、もみじ、雪で自然を表し」、また権太坂が箱根駅伝の舞台となることから、「駅伝のたすきをつなぐように、光陵の50年の伝統もつないでいこうという思いをこめて」リレーの姿を描いたとある。私たちは先人からたすきを受け取る者であるとともに、次代につなぐ者であることを伝える、真壁さんの「思い」が込められた作品、優秀賞とした。



小梁さん、真壁さん、素晴らしいシンボルマークの作成、ありがとう。

山手分校から独立高校となる時、その校名案が学校に任された。県教育委員会でも考えていただく一方、校長以下職員生徒、家庭にも呼びかけ、みんなで案を持ち寄った。記録に残るものだけでもその数175、特色の強かったのは移転予定地の地名をとった「権太坂高校」で、これには賛否両論が渦巻いた。……

この文もまた『光陵の20年』に拠るものである。2人の作品に共通して権太坂がモチーフとなっているように、権太坂は光陵生にとって外すことのできない愛着ある坂なのだろう。ところで県立高校名には地名を冠するものが多いから、「権太坂高校」は案外妥当な校名なのであろう。妥当ではあるもののあくまで私の抱く印象ではあるが、「賛否両論が渦巻いた」ことには少なからず驚きもする。さらにその記事に拠ると、校名作成にあたって、丘にあるところから「陵」の文字が使われ「陵光」という候補があったそうだ。この陵と字を入れ替えて「光陵」としたところ、「突然脚光を浴びた」とのことである。我々が光陵の名前の由来である。

修学旅行、放課後のこと

27日、49期の多くの生徒と先生方が修学旅行に旅立った。2つの便に分かれての出発であり、後発のグループの搭乘する便が離陸したときには、先発のグループはすでに鹿児島に到着していた。見送ったあと光陵に戻ったのとはほぼ同じ時刻に、後発のグループも到着したとのこと。光陵が遠いのか鹿児島が近いのか。今日30日までの4日間、知覧での平和教育、2泊の民泊、桜島での体験など、修学旅行の様々なことが、49期の多くのみなさんに、思い出として心に深く刻まれるにちがいないと思う。

自分のことを書いてみよう。

修学旅行は北海道だった。まだ東北に新幹線がなく、当時は修学旅行の航空機利用もなかったものだから、早朝京都から新幹線で東京へ、上野から常磐線、東北本線を走るみちのく号という特急で青森へという長い鉄道の旅。青森からは0時発の青函連絡船での北海道入りだ。函館に翌朝午前4時到着。道内初日はバスで長万部を経て一気に昭和新山に行った。翌日から洞爺湖や支笏湖など、札幌から南をまわった。帰路は函館0時発の連絡船。青森からは日本海側をひたすら西行南下する特急白鳥号で京都へ。のちになって飛行機で北海道に行ったこともあるのだが、私には、往路、復路での長い道のりでの修学旅行が思い出深い。生徒である私たちにとっては、車中や船中もただただ楽しく、行く先々でもはしゃぎ回っていたのだが、今にして、先生方は大変であったろうと思う。

修学旅行で班をつくるとき、とりあえずいつもの仲間が集まっていると、伊原純一君というとびっきり勉強のできる人物が我らの班に入ってきた。勿論大歓迎である。この伊原君、記憶が正確ならば3年の秋、ちょうど今頃の季節だったと思うのだが、友人間で何やら議論をしている。放課後の教室、聴き耳を立てると「ジュリアン=ソレルが……」、対して「いやそれは……なのではないか」などとやっている。「『赤と黒』はすぐに読めるから良い」などと言っていたので、ジュリアンなんか『赤と黒』の中の登場人物であることがわかった。このとき、議論する姿を格好いいなと思ったのだが、こちらはと言うと、本を読むなどといってもストーリーを追いかけるだけの身で、そもそも読書量が少なかった者ゆえ、勿論ついていくことはできなかった。おそらくその日だったと思うのだが、帰り道、京都で大きめの書店であった駿々堂に寄って『赤と黒』（スタンダード、新潮文庫・上下巻）を買った。読み始めたものの、そもそも読書の訓練のできていない者には読み進めることが困難。あの2人は「すぐに読めるから良い」と言っていたことを思い起こし、さらに愕然とする思いであった。自分と同じ高校生が、読書や社会について議論していたこと、そして議論の中身そのものに、凄味を感じずにはいらなかった。印象深い放課後の思い出である。

放課後といえば、職員室前で質問し勉強する、あるいは教室で、暗くなっても机に向かう3年生の姿をよくみかける。綺麗なノートを作っている生徒がいれば、ホワイトボードに数式を綴る生徒もいる。勉強方法は人それぞれ。みんな自分の方法を信じて行えばそれでいい。廊下を歩きながら、そんな生徒の姿を頼もしくもいとおしくも思う。目標もまた人それぞれ、それでいい。たった一度の高校3年生。ならば、決して楽しくはない進学準備であろうとも、目標に向かって、自分自身をその境遇に入れ込めばよい。ただし3年生の皆さんに是非とも伝えたいのは、こういうときこそ学校を友人を大切にすることだと思う。

明日から11月。24日には50周年記念式典がある。そのとき在籍する者にしか味わうことのできないもの。厳粛な態度でその場に臨み、光陵高校の歌を高らかに唄い、共に祝おう。